神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Midori NIINO: Curriculum Vitae and List of Works

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2646

新野緑 (Midori NIINO)

履歴・研究業績

I. 履歴

1. 学歴

1979 年 3 月　神戸女学院大学文学部英文学科卒業
1979 年 4 月　神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程入学
1981 年 3 月　神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了
1981 年 4 月　大阪大学文学部研究生入学
1982 年 3 月　大阪大学文学部研究生退学
1982 年 4 月　大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期課程入学
1984 年 3 月　大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期課程修了
1984 年 4 月　大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程後期課程入学
1986 年 4 月　大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程後期課程退学
1994 年 4 月　英国オックスフォード大学にて在外研究（~1995 年 3 月）
2002 年 2 月　大阪大学博士（文学）取得

2. 職歴

1986 年 5 月　大阪大学文学部助手
1987 年 3 月　大阪大学文学部助手退職
1987 年 4 月　神戸市外国語大学外国語学部英米学科専任講師
1990 年 4 月　神戸市外国語大学外国語学部英米学科助教授
2000 年 4 月　神戸市外国語大学外国語学部英米学科教授
2013 年 4 月～2015 年 3 月神戸市外国語大学学務担当理事・学生支援部長
2022 年 3 月　神戸市外国語大学外国語学部英米学科定年退職
2022 年 4 月　神戸市外国語大学名誉教授
2022 年 4 月　ノートルダム清心女子大学文学部英語英米学科教授
　　現在に至る

II. 主要業績

1. 編著書

（1）『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』研究社、2002 年（単著）
（2）『＜異界＞を創造する—英米文学におけるジャンルの変奏—』阪大英文学会叢書 3　英宝社、2006 年（共編著）
（3）『＜私＞語りの文学—イギリス十九世紀小説と自己』英宝社、2012 年（単著）
（4）*Dickens in Japan: Bicentenary Essays.* 大阪教育図書、2013 年（共編著）
（5）『言葉という謎—英米文学・文化のアポリア』大阪教育図書、2017 年（共編著）

2. 論文　（すべて単著）

A. 学位論文

（1）「時間・テクスト・主体—ディケンズ後期小説の構造」（大阪大学提出）2002 年 2 月学位取得

B. 単行本所収論文

（1）「『大いなる遺産』の空間構造」藤井治彦編『空間と英米文学』（英宝社）1987 年　115-40.
（2）「労働・娯楽・教育—ディケンズ『辛い時代』における「民衆」—」松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編『民衆の文化誌』　講座・英国文化の世紀　第四巻（研究社）1995 年　185-202.
（3）「震える「自己」—ピップの主体と物語—」松村昌家編『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』—読みと解釈—』（英宝社）1998 年　283-322.
（4）「『ドンビー父子商会』—時間・ジェンダー・セクシュアリティ」内田能嗣編『ヴ

ィクトリア朝の小説—女性と結婚』（英宝社）1999 年　119-46（C の（10）の日本語訳）.

（5）「視線の迷宮—『リトル・ドリット』における「見ること」と主体」松村昌家教授古稀記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝—文学・文化・歴史—』（英宝社）1999 年　454-71.

（6）「『荒涼館』における時間・テクスト・主体—エスタの語りを中心に—」『藤井治彦先生退官記念論文集』（英宝社）2000 年　507-29.

（7）「19 世紀ロンドンを歩く—チャールズ・ディケンズの『迷子になって』」御輿哲也編『移動の風景—英米文学・文化のエスキス』（世界思想社）2007 年 10-33.

（8）「自己—書く「自己」／読む「自己」」松岡光治編『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（渓水社）2007 年　293-310.

（9）「ディケンズ『荒涼館』」千葉一幹・芳川泰久編『名作はこのように始まる I』ミネルヴァ評論叢書＜文学の在り処＞別巻 1 （ミネルヴァ書房）2008 年 104-14.

（10）「『デイヴィッド・コパフィールド』の深淵—結婚・家庭崇拝・セクシュアリティ」『英米文学の可能性—玉井暲教授退職記念論文集』（英宝社）2010 年 389-400.

（11）「自己—「自伝」とその虚構化をめぐって」松岡光治編『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』（渓水社）2010 年　497-515.

（12）「W. M. サッカレー—自伝性と匿名性をめぐって—」岩上はる子、惣谷美智子編『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像—作家をめぐる人間ドラマ』（ミネルヴァ書房）2015 年　133-52.

（13） “The Belly of London: Dickens and Markets,” *London and Literature: 1603-1901.* Cambridge Scholars Publishing, 2017. Barnaby Ralph, Angela Kikue Davenport and Yui Nakatsuma eds. 95-110.

（14）「マナーの語るもの—『説得』における階級・認識・主体」『ジェイン・オースティン研究の今—同時代のテクストも視野に入れて』日本オースティン協会編（彩流社）2017 年 89-105.

（15）第 10 章「ディケンズとの対話—『三文文士』におけるリアリズムと商業主義」松岡光治編『ディケンズとギッシング—底流をなすものと以って非なるもの』（彩流社）2018 年 12 月　171-86.

（16）第 1 章「『ジェイン・エア』と『デイヴィッド・コパフィールド』—創作のプロセスを語る自己形成の物語—」岩上はる子、惣谷美智子編『めぐりあうテクストたち—ブロンテ文学の遺産と影響』（春風社）2019 年 15-31.

C. 定期刊行物所収論文

（1）「『荒涼館』における時間構造」*The Edgewood Review* 第 8 号（神戸女学院大学大学院）1981 年　57-74.

（2）「*Bleak House* の空間—Lady Dedlock を中心として—」*Osaka Literary Review* 第 21 号（大阪大学大学院英文学談話会）1982 年　62-74.

（3）「二つの円環—*Hard Times* の空間構造—」*Osaka Literary Review* 第 23 号（大阪大学大学院英文学談話会）1984 年　78-91.

（4）「*Little Dorrit* における「闇」と「光」」*The Edgewood Review* 第 12 号（神戸女学院大学大学院）1985 年　27-40.

（5）「流動する闇—*A Tale of Two Cities* の空間」『待兼山論叢』第 20 号（大阪大学文学会）1986 年　3-19.

（6）「Dickens における「表層」の裏面—*Our Mutual Friend* をめぐって—」『神戸外大論叢』第 40 巻第 7 号（神戸市外国語大学研究会）1989 年　51-67.

（7）「動揺する物語世界—*A Tale of Two Cities* におけるエクリチュール」『神戸外大論叢』第 41 巻 6 号（神戸市外国語大学研究会）1990 年　27-41.

（8）「Fabricating History—*Hard Times* における「虚構」と「現実」—」『英語青年』第 137 巻第 3 号（研究社）1991 年　118-22.

（9）「*David Copperfield* におけるロマンスの構築あるいは解体」『英文学研究』第 68 巻第 1 号（日本英文学会）1991 年　61-73.

（10）”Gender, Sexuality and Time in *Dombey and Son*”　『神戸外大論叢』第 46 巻第 1 号（神戸市外国語大学研究会）1995 年　49-76.

（11）「時間・テクスト・主体—『荒涼館』における「読むこと」—」『神戸外大論叢』第 48 巻第 7 号（神戸市外国語大学研究会）1997 年　1-22.

（12）「三人のガヴァネス—ベッキー・シャープ、ジェイン・エア、アグネス・グレイ」『神戸外大論叢』第 50 巻第 7 号（神戸市外国語大学研究会）1999 年　25-56.

（13）「「見ること」の探求—『リトル・ドリット』における二人の主人公—」『英国小説研究』第 20 冊（英潮社）2001 年　139-64.

（14）「空白の語るもの—『アグネス・グレイ』におけるジェンダーと語り—」『神戸外大論叢』第 52 巻 2 号（神戸市外国語大学研究会）2001 年　15-40.

（15）「Alexander Welsh のディケンズ批評」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 26 号（ディケンズ・フェロウシップ日本支部）2003 年　121-31.

（16）「反復の恐怖—ディケンズ「信号手」を読む」『文学』第 5 巻第 6 号（岩波書店）2004 年　171-87.

（17）「分裂と融合—『二都物語』の表象構造」『英語青年』第 152 巻第 2 号（研究社）2005 年　74-75.

（18）「テクスト分析とその「外部」—ディケンズ批評と二人のミラー—」『英語青年』第 153 巻第 1 号（研究社）2007 年　5-7.

（19）「「笑う」ヒロイン——『エマ』における言葉・マナー・認識」『英国小説研究』第 23 冊（英潮社フェニックス）2008 年　53-80.

（20）「ニューゲイト・ノヴェルのゆくえ—ディケンズ、サッカレィとライフ・ライティング」『神戸外大論叢』第 59 巻 6 号（神戸市外国語大学研究会）2008 年 10 月　25-49.

（21）「「知ること」の不幸—エリオット「引き上げられたヴェール」とディケンズの短編小説」『神戸外大論叢』第 60 巻 5 号（神戸市外国語大学研究会）2009 年 11 月　39-60.

（22）「Jane Austen と邸宅—*Northanger Abbey, Pride and Prejudice, Mansfield Park* における社会意識とアイロニー」『ジェイン・オースティン研究』第 8 号（日本ジェイン・オースティン協会）2014 年　1-22.

（23）「都市型作家の誕生—『骨董屋』に見るディケンズの自己形成」『英国小説研究』第 25 冊（英宝社）2015 年 5 月　28-55.

（24）「ジョージ・エリオットと＜一人称語り＞—「エイモス・バートン師の悲運」を中心に」『英国小説研究』第 28 冊（英宝社）2021 年 4 月　29-47.

3.　その他の研究活動

A. 口頭発表

（1）「*Great Expectations* の空間構造」ディケンズ・フェロウシップ春季大会　於甲南女子大学　1986 年 6 月.

（2）「*David Copperfield* におけるロマンスの構築あるいは解体」日本英文学会全国大会　於岡山大学 1990 年 5 月.

（3）「動揺する物語世界」ディケンズ・フェロウシップ春季大会シンポジウム「*A Tale of Two Cities* をめぐって」のパネラーとして（司会 : 小池滋　講師 : 植木研介、山本史郎）於広島大学　1990 年 6 月.

（4）「*Bleak House* における「読むこと」—時間・テクスト・主体—」ディケンズ・フェロウシップ秋季大会　於東京女子大学　1996 年 10 月.

（5）「空白の語るもの—『アグネス・グレイ』におけるジェンダーと語り」日本ブロンテ協会 2000 年大会シンポジウム「『アグネス・グレイ』を読む」のパネラーとして（司会/発題：玉井暲　発題：嶋公代）於同志社大学　2000 年 10 月.

（6）「Alexander Welsh のディケンズ批評」ディケンズ・フェロウシップ春季大会シンポジウム「80 年代以降のディケンズ批評」のパネラーとして（司会/講師：村山敏勝　講師：玉井史絵）於弘前大学　2003 年 6 月.

（7）「イギリス小説の演習」阪大英文学会第 39 回大会シンポジウム「英米文学の演習・英語学の演習」のパネラーとして（司会／講師：新野緑　講師：川島伸博、片淵悦久、岡田禎之）於大阪大学　2006 年 11 月.

（8）「ディケンズと結婚—*David Copperfield* を中心に」テクスト研究学会第 7 回大会シンポジウム「結婚しようよ—オースティン、ディケンズ、ロレンスそしてラドクリフ・ホール」のパネラーとして（司会／講師：富山太佳夫　講師：中村裕子、武藤浩史）於青山学院大学　2007 年 8 月.

（9）「Life-writing と犯罪世界」日本英文学会第 80 回大会シンポジウム「ライフ・ライティングの虚実—人物造形と歴史記述の多様性」のパネラーとして（司会／講師：小林章夫　講師：干井洋一、金子幸男）於広島大学　2008 年 5 月 24 日.

（10）「「知ること」の不幸—George Eliot と Charles Dickens」日本ジョージ・エリオット協会第 12 回大会シンポジウム「短編作家としてのジョージ・エリオット」のパネラーとして（司会：廣野由美子　講師：泉忠司、池園宏）於近畿大学 2008 年 11 月 29 日.

（11）「ジェイン・オースティンと邸宅」神戸女学院大学英米学会講演　於神戸女学院大学 2012 年 11 月 30 日.

（12）「*The Old Curiosity Shop* に見る記憶の変容—Dickens の自己形成—」日本英文学会第 85 回全国大会招待発表　東北大学　2013 年 5 月 26 日.

（13）「ロンドンの胃袋—ディケンズと市場」ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会講演　於中央大学駿河台記念館　2016 年 10 月 8 日.

（14）「藤井先生のご講義と『思想としての空間』」阪大英文学会第 50 回大会「シンポジウム・藤井治彦」のパネラーとして（司会：服部典之　講師：渡辺克昭、大森文子、川嶋伸博、足立賀代子）　於大阪大学　2017 年 10 月 28 日.

（15）「ジョージ・エリオットと＜一人称語り＞—「エイモス・バートン師の悲運」を中心に」日本ジョージ・エリオット協会第 23 回大会　於松蔭大学 2019 年 12 月 14 日.

（16）「歴史と文学の接点を探る—松村昌家先生のディケンズ研究」日本比較文学会関西支部 2021 年度 9 月例会シンポジウム「比較文学研究の拡張と刷新−松村先生追悼記念シンポジウム」（司会：森道子　講師：橋本順光　井上健）ズーム開催　2021 年 9 月 18 日.

（17）「＜見誤り＞の悲喜劇—*Emma* と *Middlemarch*—」日本ジョージ・エリオット協会第 24 回全国大会（日本オースティン協会共催）シンポジウム「Jane Austen と George Eliot「深遠なる重要性を帯びた影響」—その探究の魅惑」ズーム開催（司会：惣谷美智子　講師：川津雅江、土井良子、永井容子）2021 年 12 月 18 日.

B. 書評（すべて単著）

（1）Alexander Welsh, *From Copyright to Copperfield*『英文学研究』第 66 巻第 1 号（日本英文学会）1989 年　138-43.

（2）Patricia Ingham, *Dickens, Women and Language*『英語青年』第 139 第 3 号（研究社）1993 年　141-43.

（3）Jeff Nunokawa:　*The Afterlife of Property*『英語青年』第 140 号第 8 号（研究社）1994 年　408-409

（4）Patricia MacKee, *Public and Private:　Gender, Class, and the British Novel(1764-1878) The Browser* No.97（大阪洋書）1998 年　6-10.

（5）Laura Peters, *Orphan Texts:　Victorian Orphans, Culture and Empire*『英語青年』第 147 巻第 3 号（研究社）2001 年　190-91.

（6）Michael Slater ed., *'Gone Astray' and Other Papers from* Household Words *1851-59.　The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism* Vol. III『英文学研究』第 78 巻第 1 号（日本英文学会）2001 年　56-60.

（7）谷田博幸『極北の迷宮　北極探検とヴィクトリア朝文化』『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 25 号（ディケンズ・フェロウシップ日本支部）2002 年　104-108.

（8）Catherine Gallagher, *The Body Economic: Life, Death and Sensation in Political Economy and the Victorian Novel*『ヴィクトリア朝文化研究』第 4 号（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）2006 年　79-82.

（9）田中孝信『ディケンズのジェンダー観の変遷—中心と周縁とのせめぎ合い—』『英語青年』第 152 巻第 11 号（研究社）2007 年　690-91.

（10）自己の在処：Alexander Welsh, *Dickens Redressed: The Art of* Bleak House *and* Hard Times『関西英文学研究』第 1 号（日本英文学会関西支部）2007 年 137-43.

（11）荻野昌利『小説空間を＜読む＞—ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズ—』『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 32 号（ディケンズ・フェロウシップ日本支部）2009 年　33-38.

C. 翻訳

（1）V.T.J.アークル『イギリスの社会と文化 200 年の歩み』松村昌家、森道子、島津展子との共訳（英宝社）2002 年.

（2）ヘンリー・メイヒュー『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』松村昌家との共編訳（ミネルヴァ書房）2009 年.

（3）エイサ・ブリッグズ『ヴィクトリア朝のもの』玉井暲、米本弘一監訳　共訳（国土社）2020 年.

D.　辞典

（1）「ディケンズ主要文献解題/索引」松村昌家編『ディケンズ小事典』（研究社）1994 年　186-49.

（2）『ロンドン事典』蛭川久康、櫻庭信之、定松正、松村昌家、P. スノードン編（大修館書店）2002 年　“Fogs”の他 25 項目担当.

（3）「『デイヴィッド・コパフィールド』」西條隆雄、植木研介、原英一、佐々木徹、松岡光治編『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂）2007 年　235-55.

E. その他

（1）「小説研究と『自己』」『日本ヴィクトリア朝文化研究学会ニューズレター』第 7 号（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）2008 年　4.

（2）「Life-writing と犯罪世界」『日本英文学会第 80 回大会プロシーディングズ』2008 年 9 月 134-36.

（3）「*The Old Curiosity Sho*p に見る記憶の変容—Dickens の自己形成」『日本英文学会第 85 回プロシーディングズ』2013 年 9 月 37-38.

（4）「自伝の魅力」『マーク・トウェイン研究と批評』第 12 号（マーク・トウェイン協会）2013 年.

（5）「ディケンズとトウェイン」『マーク・トウェイン研究と批評』第 15 号（マーク・トウェイン協会）2016 年.

（6）「藤井先生のご講義と『思想としての空間』」*OLR* 第 57 号　大阪大学英文学会 2019 年 1 月 87-93.

（7）「新野緑のこの一冊—『荒涼館』（チャールズ・ディケンズ著）」『週刊読書人』2019 年 5 月.

（8）「ディケンズと同時代の作家たち」『年報』42 号巻頭言　ディケンズ・フェロウシップ日本支部　2019 年 12 月.

III.　学会活動

1.　所属学会

日本英文学会、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ジョージ・エリオット協会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本オースティン協会

2.　学会役員

日本ヴィクトリア朝文化研究学会編集委員（2002 年 11 月～2007 年 10 月）
ディケンズ・フェロウシップ日本支部理事（2002 年 10 月～2008 年 10 月）
日本英文学会関西支部事務局長・運営委員（2008 年 12 月～2010 年 12 月）
日本英文学会関西支部評議員（2009 年 12 月～2010 年 12 月）
日本英文学会関西支部理事・編集委員（2011 年 4 月～2013 年 3 月）
ディケンズ・フェロウシップ日本支部副支部長・理事・編集委員長（2011 年 10 月～2017 年 10 月）
日本英文学会関西支部理事（2013 年 4 月～2019 年 3 月）
日本英文学会関西支部大会準備委員（2015 年 4 月～2017 年 3 月 2015 年度副委員長、2016 年度委員長）
日本英文学会関西支部支部長(2017 年 4 月～2021 年 3 月)
日本英文学会本部理事（2017 年 5 月～2021 年 5 月）
ディケンズ・フェロウシップ日本支部支部長（2017 年 10 月～2020 年 10 月）
日本ジョージ・エリオット協会編集委員（2021 年 12 月～現在に至る）